

水鳥亭

坂口安吾

青空文庫

一匹のイワシ

日曜の夜になると、梅村亮作の女房信子はさっさとフトンをかぶつて、ねてしもう。娘の克子もそれにならつて、フトンをひつかぶつて、ねるのであつた。

九時半か十時ごろ、

「梅村さん。起きてますか」

裏口から、こう声がかかる。

火のない火鉢にかがみこんで、タバコの屑をさがしだしてキセルにつめて吸っていた亮作は、その声に活気づいて立ち上る。

いそいそと裏戸をあけて、

「ヤア、おかえりですか。さア、どうぞ、おあがり下さい」
声もうわずり、ふるえをおびている。

野口は亮作の喜ぶさまを見るだけで満足らしく、インギンな物腰の中に社長らしい落付きがこもってくる。彼は包みをといて、

「ハイ。タマゴ。それから、今朝はイワシが大漁でしてね」

タマゴ三個と十匹足らずのイワシの紙包みをとりだしてくれる。
「これはウチの畑の大根とニンジン」

それらの品々は亮作の目には宝石に見まごうほどの品々であった。彼は茫然とうけとっているのである。その目には、涙が流れさえるのであった。

「もう、みなさんは、おやすみですか」

「いえ、かまいませんよ。どうぞ、あがって下さい」

「いま伊東からの帰り路ですよ。まだウチへ行ってないのです。おやすみ」

野口は笑顔を残して、静かに立去る。

日曜の夜の習慣であった。信子と克子は、これが見たくないので、早々にフトンをひツかぶって、ねてしもうのである。

そのくせ信子も克子も野口のくれた物を存分に食う。さかんにくれた人と貰った人の悪口をわめきながら食うのである。

「そんなに厭な人から貰った物なら、お前たち、食うな」

亮作は怒りにぶるぶるふるえるが、二人の女はとりあわない。

そして益々悪口を叫びつづける。

「なんですね。あの男は。この子の生れたころは、あなたの同僚ですよ。ひところは失敗つづきで、乞食のような様子をして、ウチへ借金に來たことだつてありましたよ。それになんですか。いくらか出世したと思つて、たかが戦争成金のくせに、威張りかえつて」

「威張つておらんじやないか」

「威張つてますよ。昔はキミボク、イケぞんざいに話し合つていたくせに、いくらか出世したかと思つて、あなた、私。おお、イヤだ。以前なら、いま伊東の帰りだよ、といったところを、いま伊東の別荘からの帰り路なんですよ。なんてイヤらしい」

「バカな。へりくだっているんじゃないか」

「ウソですよ。へりくだると見せて威張るのよ。悪質の成金趣味よ。ねえ、克子」

「そうよ。無学文盲の悪趣味よ。裏長屋の貴族趣味ね」

「バカな。お前らのハラワタが汚いから、汚い見方しか出来ないのだ。だいいち、野口君は、伊東の別荘などと言いはせん。いつも、ただ、伊東の、という。つとめて成金らしい口吻をさけているのが分らんか」

「つまんない。裏長屋のザアマス趣味をひっくりかえしただけよ」
女子大生の克子は投げすてるように言う。

「伊東の別荘と言いたいのを、伊東で切らなきやならないからイ

やらしいのよ。使用人に届けさしやいいものを、今、帰り路です
なんて、恩にもきせたいし、伊東の別荘も言いたいからよ。わざ
と、へりくだることないじゃないの。いつもタマゴは三ツなのね。
不自然ね。ムリして数を合せてき。一から十までムリしてるのよ」
「生意気な。なにを言うか。このイワシをみる。七匹じゃないか。
ムリして数を合せてはおらん。お前らのゲスのカングリ、汚らし
いぞ」

克子は皿の上の焼いたイワシに白い眼をむけて、

「七匹なんて、変ね」

と、薄笑いをうかべる。イワシを突きこわして、ゆつくり食べ
ながら、

「九匹じゃ、惜しいのね。六匹に一匹、足したツモリかしら。九匹から二匹、ひいたのかしら」

亮作はつかみかかりたいほど怒りの衝動にかられて、

「私の問いかけたことにハッキリ答えろ。ムリして数を合せているか。これ！」

「それは、たぶん」

克子の顔から血の気がひいて、白い薄笑いをはりつけたようになるのであった。

「忠誠と柔順に対する特別の恩賞ね。一匹のイワシのために老いの目に涙をうかべて喜ぶ人がいたのね。昔の同僚が町工場の小成金に出世して、拾いあげてくれたの。実直でグズなところを見こ

まれて、会計をあずかる重要なポストを与えられたのよ。けれど、平社員で、サラリーは安いのよ。その代り、社長は、あなた、あります、とテイネイな敬語で話しかけて、あたたかく遇してくれるのよ。そして六匹のほかに、余分に一匹のイワシも与えるの。すると平社員は老いの目に涙をたたえて、日曜の夜の社長の別荘帰りをお待ちするのよ」

女子大学生の理にかなった皮肉が、社長からわが身へと移ると、亮作は抵抗を失つてしまうのである。彼の息の根は怒りに止まる。逆上するが、口をつぐんで、うなだれてしまうのである。

亮作と野口は、東京近郊の農村で、小学校の教員をしていたことがあった。野口は教員にあきたらず、事業に手をだして落魄し、

チャルメラを吹く中華ソバ屋をやったり、実入りがあるというので、葬儀屋の番頭をやったり、病氣上りの馬を安く買って運送屋をやったり、馬がコロリと死んだりした。死ぬかも知れないという不安を賭けての仕事だから、諦めはついていたが、この馬は死の直前に発狂して、クワツと血走った目をひらいて瀕死の藁床から起きると、天へ跳び上るような恰好をした。つまり後肢で立って、前肢を人間の幽霊のように胸に曲げて、クビを蛇がのびるように天へねじあげたのである。そして綱を切ってしまった。馬小屋をとびだし、真一文字に五六町ほど道を走って、バツタリ倒れて、こときれたのである。医者がみたわけではないが、野口は馬の脳膜炎だと人に話した。

その後、小さな町工場をやつて、今や首くくりというドタンバに、戦争がはじまつた。にわかにはトントン拍子となり、成金になつてしまつたのである。

野口はウダツのあがらぬ亮作を拾いあげて会計をまかせた。グズではあるが、悪事をするほどの能もないというところに目をつけてのことだ。サラリーは時の公定価格で、教員よりは良かっただけである。

野口は親切であつたが、キンチャクの紐をゆるめない男であつた。そして彼が使用人たちに敬語で話しかけるのはケチンボーをおぎのうためだと言われても仕方がない程度にケチンボーであつた。彼は亮作に産報のビールの券や、食券などを与えたが、飲食

するには亮作が金を支払わねばならない性質のものであった。人々は（亮作も）それを野口のケチンボのせいにしたが、そうしないよりは親切であつたに相違ない。

克子の言葉が正しいことを亮作は知っていたのである。野口は日曜ごとに別荘の畑のものやイワシなどを持参してくれて、なんでもないことのように置いていったが、会社での午休みのひとひるきなどに、伊東ですら、一匹のイワシを手に入れることが、すでにどれほど困難であるか、さりげなく言うのであった。

一度や二度は我慢ができた。しかし、黙っていれば、おそらく毎日くりかえすだろう。

「エンジンのついた船はですね。それが焼玉エンジンですよ。み

んな輸送船に徴用されています。若い漁師は戦争に持つてかれ、年寄まで船と一しよに徴用ですよ。それで千人食べられるだけイワシがとれたらフシギですよ」

そこで、とうとう亮作は考え深い人のように顔をあげて言うのであった。

「先日、あちらから来た人にききましたが、網をやってますな。たしか、だいぼうあみ大謀網もやってるそうです」

野口はそれが亮作の挑戦であることを見抜くが、微笑を失いはしない。

「あちらツて、どこからの人ですか」

「え、沼津です。遠縁の者が、あそこの工場にいて、時々本社へ

上京のたび、私のウチへ寄るのですが」

亮作はおどおどしている。亀の子のように怯えた顔である。今にも甲羅にひっこめそうだが、頑強に言葉をつづけるのである。

「大謀網は、うまくいく時は、ブリが四五万尾はいる。海の魚は無尽蔵ですな」

「沼津の大謀網は初耳ですな。沼津は漁場ではありませんよ」

「いえ、沼津ではないのです。あのへんにちかい漁場での話です」
亮作は泣きそうな断末魔の顔だが、必死に口をうごかす。哀れであるが、シブトく、にくたらしくもある。

野口の顔色が変わる。息づかいが、はげしくなる。

「私はこの目で見ていますよ。あなたは耳にきいたことで、私が

目で見たことを否定しようとなさるのですか」

亮作は沈黙する。

「太平洋の沿岸は敵の潜水艦でとりかこまれていきますよ。真鶴まなづる

では、大謀網に敵潜が突ツかけてしまいましたよ。ホラ貝をふくやら、大騒ぎしたそうですが、網をかぶったまま、逃げられちゃいましたね。ですからどこの大謀網もかけツ放しで、危くつて、沖へでる舟はありませんよ」

野口が顔色を変え息ぜわしくなれば満足だと、亮作の泣き顔が語っているように見える。しかし野口も、亮作が沈黙すれば、まあ、満足であつた。そして、社長の落ちつきを取り戻すに時間がかからなかつた。

野口は亮作にお茶をついでやって、

「どうぞです。一度、伊東へ遊びにいらつしやい。今度の日曜にお伴しましょう。とにかく、別天地ですよ。ウチの畑は二町歩あります。鶏も一週間ぶんの卵を生んで、私たちを待っていますよ」

「ええ。ぜひ一度、お伴させていただきませう」

亮作も忠実な社員にもどつて、ニツコリ笑う。そして、社長の善良な思いやりと、親切を、あたたかく感じとるのである。

月曜からの六日間、野口のケチンボーにイライラと不快な思いをさせられるにしても、日曜の一日はその親切な訪れをまつ喜びしおとでいっぱいになる。そして、夜十時、静かに裏戸に近づいてくる蹙あ音に、最高潮に達する。

あるいは裏戸に跫音をきく瞬間までは、社長のケチンボー、安い月給を敬語でおぎのうことなどを罵る思いがくすぶっていたかも知れない。しかし、訪う人の声によって彼であることを確めると、もうダメだ。亮作は感動だけのカタマリであった。胸の鼓動は羽ばたいて彼を裏戸へ走らせ、老いの目に涙をうかべさせてしまったのである。

亮作はその自分をあさましいとは思わなかった。人の善意を信じることは大切だと思うのである。しかし、信子や克子を相手にして、彼はそう考えているのであって、彼自身が直接社長に対しては、一週間の六日間はそのケチンボーや敬語を軽蔑しているのであった。だから一匹のイワシに泣く男をあさましいと思うのは、

亮作が誰よりも激しかったかも知れない。

女房や娘の汚くて意地悪い表現によつて、一匹のイワシに泣く己れの姿をシテキさされては、もうオシマイであつた。彼は逆上しながら、口をつぐんで、うなだれてしまう。

しかし、やがて、カマクビをたてなおす。

そして、社長に遠まわしの皮肉をきりだすと同じようにオドオドと、しかし執拗にくいさがる。

「お前はそのイワシを食べてはいけない」

言葉は、できるだけ静かであつた。ただ、抑えきれない亢奮が口から泡をふかせているだけである。

「それほど軽蔑し憎むものをなぜ食べるのだね。それはお前が軽

蔑しているものよりも、もつと軽蔑すべきことだと思わないかね」

それに対して、克子はまずこう答える。

「ツバがとぶわね。食物に」

それからゆつくりと、ゴミをすてるように、火のない火鉢の中へイワシを投げすてる。

「これ待ちなさい！」

父は娘の腕をつかむ。もしくは、つかもうとする。そして叫ぶ。「今さらゴミよりも軽蔑した手ツキでイワシを投げすててみせても、今まで食べていた意地汚さを打ち消す力にはならないのだよ。むしろ今までの意地汚さを自分で軽蔑したことになるのだ」

克子は顔の血の気をまったく失って立上る。お弁当をとりあげ

る。彼女はこれから徴用の仕事場へでかけるところだ。

克子は膝の上でお弁当をひらいて、オカズの一匹のイワシをつまみあげて、流しへ抛りだす。一すじの涙がながれ、やがてかすかにシヤクリあげるが、クチビルをかみしめて身支度をととのえなおす。

「克子をいじめて、おたのしいのですか」

信子のカン高い叫びが彼を突きさす。

彼は無言である。

「克子を泣かせて、縁起でもない。これから徴用の職場へ出勤という克子を。女子の徴用は男子の出征と同じですよ。一匹のイワシを食べるぐらいが、何様を軽蔑することになるんですって！

私だつてイワシよりも棺桶屋を軽蔑しますよ。たかが一匹のイワシをたべるにも高尚な理窟がいるんですか。私は理窟ぬきに棺桶屋を軽蔑したいもんですよ。たかが一匹で意地汚いとは、おお、イヤなこと。意地汚いのは、あなたですよ。一匹のイワシを娘に食べさせるのも惜しいんですね。この御飯は、克子のために、田舎の大伯母さまが届けて下さるお米ですよ。あなたは、それを食べているではありませんか」

亮作は無言であつた。克子は勝ち誇るために泣いているが、彼は泣くこともできない。

彼も立上つて出勤の支度をはじめ。彼はイワシを投げすてた克子のように、お弁当の御飯を投げすてることはできない。

戦争に負けるか勝つかということも、この苦しみから遁れられるか遁れられないかということよりは重大に見えないのである。

本と鶏小屋

亮作は皇軍勝利確信派であつたが、信子と克子は敗北確信派であつた。

サイパン戦況不利の報に、母と子はいち早く荷物の疎開をはじめた。

信子が着古した衣類をせっせと荷造りしているのを見て、克子が言う。

「そんなもの、持ってって、どうするのよ」

「これだって、まだ着れますよ。あなたのためにもさ。いずれ役に立ちますよ」

「私、そんなもの、着やしない」

娘は目を白くして、舌打ちした。

「衣裳道楽の大伯母さまが、一生かかっておあつめになった美術品のような衣類を、そっくり私に下さるというのに。そんなもの、女中だつて着やしない」

「モツタイないことを言うんじゃないよ。これはみんな私がお嫁入りのとき、持ってきた物なのよ。それをアレコレ工夫して、一生着こなしたんですから、なつかしいのよ。あなたのお父

さんに着物を買っていただいたことなんて、一度もありません」
娘は母の感傷などに一顧を与えた様子もなかった。しかし父への軽蔑は新にしたようであった。

「それ、ほんと。お嫁入りして今までに？」

「ほんとですとも」

「ほんとかしら。お嫁入りして今までツて云えば、私の年よりも多いわけだわね」

「あたりまえよ」

「フウン。グズだわね」

母の無言は同意をあらわしているのである。

戦時の夜は静かであった。二人の会話はグズの耳に筒ぬけにき

こえた。

亮作は検定試験をうけて、中等教員になろうと思っていた。小学校の教員になると、ただちに受験準備をはじめたのである。彼の乏しい給料は概ねそのために費された。歴史と地理を志し、後に国漢も受けたが、何度やってもダメであった。

信子も亮作が小学教師で終らぬことを信じた上で結婚した。中等教員はおろか、その上の試験にもパスして、教授、学者になるかも知れないと思っていた。仲人の口もあつたが、書籍の山にうずもれた彼の書齋の風姿に接したときに、なんとなくそう信じたのである。

三十前後までは、彼への世間の信用も大きかった。学識深遠、

小学教師などで終るべき凡庸の徒ではない、というのである。人々は彼を仰ぎ見た。

四十前後には、完全にその逆であつた。同じ人間が、同じ土地で、目立つて変つた生活はひとつもしていないのに、こんなに世評がひツくりかえるということは、信じられないようであつた。しかし世間は彼を遇するに、ひところはそのように甘く、そして後には冷めたかつた。

彼に憐れみを寄せる人もなかつた。軽蔑と嘲罵が全部であつた。学務委員はそれが父兄全体の声でもあると云つて、彼が全然見込みのない受験のために、当面の教育をないがしろにしていることを校長につめよるのである。

校長は彼のために弁護しなかつた。

「まったく、あの人物には困りましたよ。よそへ廻したくても、どこの校長も引きとつてくれません。まだしも代用教員を使う方がマシだと言いましてね」

「そんなことを云つて、大事な子供をまかせておく我々はどうなるのかね」

「今になんとかしますが、本人にも言いきかせますから、辛抱して下さい」

そのたびに彼は校長室によびつけられ、学務委員や有力者の家を謝罪して廻らねばならなかつた。

そして彼の月給は、いつまでたつても、ほとんど初任給に近か

った。彼は十の余も若い人たちに追いつかれ、新学期のたびに、彼の級をひきついで若い教師に、彼の一年間の教育がなっていないことを罵倒されるのであった。

信子は、大伯母の援助がなければあなたを道づれに自殺したろうと克子に言いきかせるのであった。

信子の母の姉、克子には大伯母に当る人が富裕な人と結婚し、わがままな生涯を送っていたが、ツレアイも死に、アトトリもなかった。このわがままな年寄が、克子を養女の筆頭を選んだのである。

信子はひとり児を養女にだすことに、反対の理由を知らなかった。梅村亮作の家名の如きは、絶えることが世のため人のため

ある。その家名には恥と貧窮と、悲しみと嘆きがつきまとい
るだけだ。呪いのろによつて充たされているだけである。梅村亮作の
恥辱まみれの一生は、彼ひとりでしめくくるのが当然であつた。

大伯母からは克子の教育費が送られ、克子は女子大学へ進んだ。
亮作が世間からうけた冷遇も、大伯母のそれに比べれば、あまい
ものであつた。大伯母の彼に対する感情は憎悪であつた。全人格
を無視し、否定し、刺殺していた。

克子は休暇のたびに、母と一しよに大伯母のもとで暮すようになつたが、亮作は門前にたたずむことも許されていなかった。そして克子の休暇中は、彼は自炊して出勤しなければならなかつたが、恥辱という苦痛がなければ、一人暮しの不自由も苦しいとい

うものではなかった。

克子の教育費は、亮作を含めた生計費に用いることを禁ぜられ、信子もその禁令を堅く守っていたが、戦争がはげしくなり克子への食糧が大伯母から届けられるようになる、そのもの自体の恩恵に浴することは稀れであつても、配給の食糧をかなり豊富に与えることができて、亮作も間接の恩恵に浴することができた。

母と娘は、夜毎に疎開の荷造りをしていた。荷物の送り先は、もちろん大伯母のもとであり、亮作の品物がその荷造りから一切はぶかれていたことは言うまでもなかった。

彼女らの荷物を送りだしても、炊事道具やチャブダイは亮作に属していたので、三人の生活は不自由はなかった。

二人は亮作に荷物の疎開をすすめなかつた。彼女らの生活が不自由になるせいもあつたが、亮作の品物などは一切煙と化したところで惜しくはなかつたからである。

二人の荷物が発送されると、空間のひろがりが目立つた。それが目にしみると、亮作も疎開ということ考えた。せめて本だけは、と考える。それだけが彼の足跡だった。本が焼かれることを思うと、自分が焼かれるような苦痛を覚える。

わずかな月給から買いだめた蔵書が二十何年のうちに二千冊余になつていた。

「なア、信子や。この本だけでも大伯母さんに預つてもらえないかな」

信子はあきれて、溜息をつくのであった。

「なにを言うんでしようね。あなたは。よくも、まア、羞しげもなく、そんなことを。私はBに依頼して、この本だけは焼き払ってもらいたいと思つていますよ。考えてもごらんなさいよ。この本のおかげで、私は一生を棒にふつたようなものよ。どんなに泣かされたか知れませんか。あなたは、よくも、まア、ガラクタ本を焼き払う気にならないものですね。人を散々泣かせて、三文の得にもならないどころか、笑いものになったばかりじゃありませんか。この本の一冊ごとに、あなたが低脳だという刻印が捺してあるのですよ。低脳の証拠を毎日眺めて平気でいられるのがフシギですよ。どこまで低脳だか、分りやしない。私や克子がともか

く生きていられたのは、大伯母さまのおかげです。さもなければ、本のために母子心中していただきますと」

信子の偽らぬ気持であつた。克子にはきき古りた愚痴である。これをきかされるために生れてきたかのように、ウンザリさせられてもいる。信子の語気は激しかったが、克子の耳には陳腐なクリゴトで、なんの興もそられなかつた。

「お父さんは、どこへ疎開するの」
克子がきいた。

皮肉な思ひは含まれていない。同じところへ父が疎開するはずのないこと、そして、それが当然であることを信じているだけの話であつた。父の行先に、ちよつと興味があるだけである。

「疎開する所があるものですか」

信子の攻撃がつづく。

亮作はちよツと首をすくめて、困惑した薄笑いをうかべた。

「どこへ行く必要もないがね。そろそろ皇軍の総反撃のはじまるころだ。今ごろ、はじまっているかも知れん。敵さんの物力で半永久的な飛行場をつくらせてから、とりかえす。すこし手がかかると、物量を節約するには、こんなこともせにやならん。作戦は計画通りいっとる」

日本の反撃は亮作の反撃であつた。彼の顔色は、ちよツと得意にかがやく。これが彼の為しうる唯一の執拗な反撃であり、仕返しなのである。

克子はそんな子供じみた仕返しに興味がなかった。

「じゃア、疎開しないの？」

自分の興味だけ追求する。

「疎開するところが無いからなのよ。負け惜しみツてことが分らないのかね」

「いいじゃないの。きいてみたつて」

「きくだけ、ヤボよ」

「でも、ききたいわね」

「きいて、どうするのね」

「この本の保管托されてさ。なんの役にも立たなかったガラクタだなんて、その人知らないわね。おもしろいじゃないの」

亮作は亀の甲から首をだす。

「人間には夢が必要だ。夢を持たなきゃ生きられない。三文の値打もないと分つていても、夢に托して生きる。お前さん方には、わからない。戦争が終つて、私と本が又一しよに暮すようになる。時世が變つて、私のような老書生も試験にパスして、新時代に返り咲くかも知れない。バカらしくとも、夢に托して生きて行くのがカンジンさ」

「なんだ、つまんない」

克子は即座にうちけした。

「戦争が終つてから試験にパスしたつて、もう停年の年齢じゃないのよ。どこにも夢なんて、ありやしない」

「克子は夢がないのかね」

亮作の言葉は穏やかであったが、例の弱々しく執念深い抵抗が、すくんだと見せて小さなカマクビをもたげているのである。

克子は軽く舌打して、その小さなカマクビを払い落した。

「軽蔑されるの、当然だわね。私たちの年齢に夢がない人あつて？ お父さんの年齢で、試験にパスする夢なんて、よくよくだわね。再来年は、私でも中等教員の免状もらえるのにね。中等教員になりたいなんて、思いもしないけどね」

克子の述懐に底意はなかったようだが、亮作のカマクビはうち砕かれて、抵抗も言葉も失ってしまった。

どうしても本だけは疎開しようと亮作は思った。それだけが二

人の女に抵抗する手段のように思われた。本に対するやみがたい愛惜もたしかであった。

ひねもす本のことだけが気にかかる。

「社長におねがいがあるのですが」

と、亮作は野口にたのんだ。

「実は、疎開のことですが」

「疎開なさるんですか。結構ですね。早いが勝ですよ。どちらへ？」

「いえ、それがね」

「奥さんの伯母さんの所でしょう。大変なお金持だそうですね。羨しいですよ。こっちへも少し分けて下さい」

「ええ。家内と娘はそこへ疎開させますが、私はちよつと遠いものですから」

亮作は家庭の不和を隠していた。誰にも知られなくなつたのである。

「遠いツたつて、なんですか。持久戦ですよ。物資のあるところに限りますぜ。こんな小ツポケな工場を持つたおかげで、私なんか身動きができないから哀れですよ。田舎へひツこんで、新鮮なものをタラフク食べて、忙しい思いを忘れたいですよ」

「実はお宅の伊東の別荘の片隅をかしていただけたらと、あつかましいお願いなんですが」

思いがけない申出に、野口の微笑が一時に消えた。やがて苦笑

して、首を横にふった。

「御依頼に応じかねますな。たつた四間の掘立小屋ですよ。ウチの家族だけで、はみだしてしまいますよ」

「軽井沢でも結構ですが」

「あれは人に貸していません」

野口は嘘をついた。

彼は軽井沢と伊東に別荘を持っていた。それは彼の多年の夢であった。夏は北方の山荘に暑気をさけ、冬は南海の別荘に正月をむかえる。

その夢が手ごたえもなく実現してしまつたのだつた。

軽井沢は住みてを失い安値に売りにでたのを買ったもので、中

流の立派な別荘であつた。

伊東には手ごろの別荘の売物がなかつたが、温泉のでる土地を買つた。そこは駅から成年男子で四十分以上も平野の奥へ行きつめたところで、わずかな平地を残して三方は山にかこまれ、人家はほとんどなかつた。

畑の中に温泉が湧きでていた。その野天温泉と、それを中心にした二町歩ほどの田畑を買つた。

伊東の駅にちかいところは人家が密集して、もう発展の余地がない。未来の繁栄は奥手の発展にかかつている。奥へ行くほど泉質もよかつた。

今は人煙まれなドンツマリだが、戦争がすんで遊山気分がおこ

ると、遊樂地帯の發展ぐらい急速なものはない。野口は思惑をはたらかせて、土地ぐるみ温泉を買った。ゆくゆく大旅館をたてて、儲けながら温泉気分にひたろうというモクロミであるから、当座のしのぎに小さな別荘をつくった。留守番を置いて田畑をつくらせ、鶏を飼い、戦争中の栄養補給基地に用いるという一石二鳥の作戦でもあった。

しかし、伊東の駅へ降りて、袋小路のような平野が山に突き当るドンツマリまで四五十分の道中をてくっていると、戦争に勝つて気違い景気が津々浦々にみなぎっても、伊東の繁栄がここまで延びるには、目の玉の黒さの方がオボツカナイような気持になる。又、それだから、温泉ぐるみ二町の田畑を安く買うこともできた

のである。

亮作もこの別荘へ一度だけ招待されたことがあつた。なるほど当座しのぎの安普請で、部屋数は四間しかなかった。

鶏小屋が二つあつた。大きい小屋に二三十羽の鶏が飼われ、小さい方は廃屋になつていた。亮作はセツパつまつて、それを思いだした。もう何でもいいというヤケであつた。

「たしか鶏小屋が一つ、あいてましたね」

「ハ？ なんですか」

「鶏小屋が一つ、あいてましたね」

「ハア。鶏小屋ですか。あいています。それが、どうしたというのですか」

「あれを貸していただけませんか」

「鶏小屋を！」

野口は興にかられて亮作を見つめた。

「小さい方の使っていない小屋のことでしょうね」

「むろん、そうですとも。使用中のものを、お願いできると思いませんから」

「あの小屋なら、一間の四尺五寸、つまり一坪に足りないのですよ。あれをどうしようと仰おっしや有るのです」

野口は益々興にかられて亮作を見つめた。そんな目で見つめられると、亮作はナメクジが溶けるように目をすぼめて泣き顔になるのであったが、弱々しい、しかし執拗な抵抗が、また、カマク

ビをもたげるのである。

「いえ、ナニ、ちよツと本を二千冊ほど疎開させたいのですよ。ほかに金目のものがないわけではありませんが、私は財産を疎開させようなんて、考えちやおりません。戦争ですから、職域を死守する、私は東京を動きません。一兵卒のつもりです。身辺の家財もうごかしません。死なばもろとも、です。けれども、書籍は文化財ですから。私のは、特殊な専門図書ですから、金には換算できないものがあるのです。まア、見る人によりけりですがね。焼け残れば、よろこんでくれる人もあるでしょう。そして後世、役立つこともあるでしょう。私のためじゃアないのですよ。碌々たる私の一生でしたが、一つぐらい、ほめられることもしておき

たいと思ひましてね。いまわの感傷にすぎませんがね」

それが野口のカンにさわった。彼はさりげなく微笑して、

「とんでもないことです。そんな国宝的な品物はお預りできません。保管の責任がもてません。私はズボラですから」

「いえ、責任をもつていただく必要はありません」

「ダメ。ダメ。あなたがそう仰有つても、戦火で焼くとか、紛失するとか、してごらんなさい。野口はくだらぬ私物を大事にして、人から托された国宝的な図書を焼いてしまった、と後世に悪名を残すのは私ですよ。それほど学術的価値のあるものでしたら、文部省とか、大学などに保管を托されることですか。そんな物騒な高級品は、私のような凡人の気楽な家庭へ、とても同居を許され

ません。意地が悪いようですが、堅くおことわり致しますよ」

亮作は無言であつた。その悄然たる有様に野口は慈愛の眼差しをそそいだ。

「ねえ、梅村さん。あなたは間違つてやしませんか。命あつてのモノダネですよ。あなたがどんな貴重な図書をお持ちか知れませんが、失礼ですが、小学教員のあなたが、——いや、悪くならないで下さいよ。大学教授でも、専門学者でもないあなたが集めた程度の書籍は、ちよつとした学者の本箱にはザラにあるにきまつてますよ。強がりやを仰有つては、いけませんね。それは、あなたの一生の愛着が本にこもっていることは分りますがね。しかし、戦争ですよ。命あつてのモノダネですよ。足手まといの本なんか、

売っちゃいなさい。そのお金で、片田舎の百姓家でも買って疎開先を用意するのが利巧ですよ。意地悪いようですが、本の疎開でしたら、あの鶏小屋は絶対にお貸し致しません。しかし、まさかの用意に、鍋釜、フトンでも分散しといて、イザというとき、逃げこもうという算段でしたら、あの鶏小屋をあなたに開け渡してあげます」

亮作は泣きそうな顔に微笑をうかべた。

「いえ、いいんです。私は疎開は考えません。一億玉碎の肚ですから。最後の御奉公ですよ。それに、日本は、負けやしません。最後には勝つのです。何年先か分りませんがね。そのとき私の残した本が、まア、いくらか、お役に立つでしょう。私はそれだけ

で満足です。ほかに思い残すこともありません」

「梅村さん。戦争は何百万の雷をあつめたように、容赦しませんよ。小さな負け惜しみや、小さな意地をはってみたって、なんにもなりやしませんよ」

「いえ、なりません。時間の問題ですから。軍は秘密兵器を完成しています。敵が凶にのって、総攻撃に来たときに、奥の手を用いて一挙に勝利へみちびく。これが軍の既定の作戦なんです」

亮作は口に泡をためて無数にツバをふきながら言う。野口は微笑しながら、それを見つめた。ひどく感服したように。

「フトン、衣類、鍋釜でしたら、鶏小屋へ保管してあげます。まあ、せいぜい、分散しておくことですよ。必需品ですから。そし

て、書籍などは、値のあるうちに、売り払いなさい。もつとも、タキツケの役に立つときが来るかも知れませんがね」

「ええ、まア、タキツケには、なりますね。戦国乱世には、皇居の堀や国宝の仏像で煖をとります。庶民は、仕方のないものです。私の本も、おなじ運命かも知れません」

野口は益々感服して首をふり、あきらめて、ふりむいた。

信子と克子は正月の休みに大伯母のもとへ行ったまま、学校へは診断書を送って、再び東京へ戻らなかつた。

三月十日の空襲に、亮作も野口も焼けだされた。しかし、命は助かった。

亮作は大本営発表や、新聞などの景気のいい言いぐさを信用し

ていたし、それまでの空襲の被害が少いので、タカをくくつて、防空壕もつくらなかつた。もつとも、彼の住むあたりは、土を掘ると水がわくので、手軽に防空壕もつくれなかつた。

亮作は家財を一物も助けることが不可能であつた。それでも命の助かつたのがフシギなくらいであつた。

この夜の空襲は、敵機が投弾を開始して諸方に火の手があがつてから、ようやく空襲警報がでた始末で、亮作が身支度を終らぬうちに、バクダンの凄い落下音がせまりはじめた。それでも彼はまだ空襲の怖しさを知らなかつたので、身支度だけは終ることができたし、現金の小さな包みを腹にまきつけることも出来たのである。

外へでると、火の手がせまっていた。目の前が、まっかなのだ。焼けた烈風が地を舐めて走り、いきなり顔を熱のかたまりがたたきつけた。彼は悲鳴をあげて、とびあがった。風下へ夢中に泣いて走っていた。

彼は逃げた道順がまったく分らない。逃げ足が早かったので助かったのである。常に火に追われ、火にさえぎられて、とめどなく、逃げまどっていただけだ。そして逃げのびる先々に、彼に安全感を与えるだけの堅牢な建物や防空壕や広い公園などのなかったことが、彼を助けてくれたのである。

それほどの長距離を走った自覚がないのに、彼は海岸にたたずんでいた。そして夜明けをむかえたのである。

わが家の跡には何もなかった。くずれた瓦礫の下に、書物の原形をそつくりとどめた灰もあつた。みんな燃え失せたのだ。まだ東京には多くの家が残っているし、さらに多くの家が日本の各地には有るけれども、彼の住む家はもうどこにもない。

たった半日に、彼は無数の焼けた屍体を見た。見飽いて、立ちどまる気持も起らない。しかし、わが家の焼跡を見ると、悲しさがこみあげて、涙がとめどなくあふれた。そのあたりの路上や防空壕にも黒こげの屍体があるが、各々の焼跡に立っているのは、彼だけであつた。

野口の自宅も工場も焼けていた。焼跡へ行ってみると、野口夫妻と子供たちが、墓の中から出て来たように、顔も手足も泥まみ

れに、かたまっていた。

みんなおし黙ってニコリともせず彼をむかえた。

「みんな焼けましたよ」

野口はつぶやいた。何も言いたくない、というような、不キゲンな声だった。

「私もみんな焼きました。残ったのは、私の着ているものだけです」

「命が助かっただけ、しあわせです。しツかりしなさい」

険悪な顔、噛みつく声であったが、亮作には、人間味がこもつて、きこえた。

すがりつきたい思いであったが、野口の手を握るだけで精一ぱ

いであつた。なつかしさに、胸がはりさけるようだ。彼は嗚咽して、数分は言葉もなかつた。

「しツかりしなさい」

野口はやさしく彼の肩に手をかけた。

「私はバカでした」

亮作は、しゃくりあげた。

「そんなことを言つても、どうにもなりやしませんよ。夥しい屍体を見たでしょう。利巧な人も、たぶん死んでることでしょうよ」

野口は相変らず不キゲンだった。彼は死と闘つたのだ。助かるための努力だけが、怖い一夜の全部であつた。

亮作も死に追いつめられた一夜の恐怖は忘れることができない。

しかし、今となつては、生き残つた恐怖の方が、まだひどかつた。「私に鶏小屋をかして下さい。私は、すべてのものを失いました。私はバカでした」

亮作は、はげしく、しゃくりあげて、叫びつづけた。

「私をひとりぼっちにしないで下さい。お願いです。考えただけで、息がとまってしまいます。下男でも作男でも、なんでもします。伊東へつれてつて下さい。鶏小屋へ住ませて下さい」

野口の子供たちは、あきれて、目をそらした。

「あなたはフトンも衣類も疎開しなかつたのですか」

「いえ、私は、いらななのです。私はひとりぼっちが怖いのです。夜露をしのぐ屋根さえあれば、たくさんなんです。こんな怖

しいところへ、私を見すてないで下さい」

「むろん助け合うことは必要です。しかし、奥さんの疎開先へいらしたら、どうですか。あなたは逆上して、いろんなことを忘れてらっしゃるようですね。屋根だけじゃありませんよ。フトンも、鍋釜もある筈ですよ。奥さんが待っておられますよ。心配しておられるでしょう」

「いえ、私は働かねばなりません。社長に見放されては、生きることができません」

「私の工場は焼けました。伊東にはチツポケな家があるだけです。私は、もう社長ではありません」

「私を見すてないで下さい」

亮作は狂ったように嗚咽した。

野口は苦りきって、目をそらしたが、思い返して、つぶやいた。「とにかく工場の後始末に、私だけは四五日東京に残らなければなりませんまい。あなたにも手伝っていたただかねばならないことが有るかも知れません。それから先のことは、お互に分りやしませんよ。私はどこかの工場へ勤めますよ。一工員にすぎません」

彼はふりむいて、焼跡や防空壕をほじって品物を探しはじめた。

売買

亮作は野口にゆるされて鶏小屋にすんだ。床をはり、板で囲つ

た。戦災者の特配品と、人々からの貰い物で、日常の用は最小限度に間にあつた。彼は現金を持っていたが、食物以外には一文も使わなかつた。タオルを持たなかつたので、温泉につかると、からだの乾くまで、浴室にたたずんでいた。野口の家族たちは、彼に同情することや、物を与えることをやめた。

「梅村さん。利用ということを考えてはいかがですか。からだをふくにはタオルでなければならぬ筈はありません。なにも持たないといつても、全然代用品がないこともありますまい。ほらね。たとえば、あなたは肌身放さず腰にフロシキ包みを巻きつけていらつしやるでしょう。あのフロシキだつて、タオルの代りにはなるでしょう」

そのフロシキには、かなりの現金がつつまれていゝらしい。いくらぐらいかしら、と野口の家族は噂していた。野口は言葉をつづけて、亮作をからかった。

「あなたはウチの鉋なたでエンピツをけずっていらつしやいましたね。鉋は叩き割る道具ですが、どうでした、うまく削れましたか。ウチの者に仰有ればナイフぐらいお貸ししますよ。しかしナイフぐらいお買いになつてはどうですか。まだ売つてる店を見かけましたよ」

「いえ、買いません。買いたいと思いません。お金が惜しいからではありません。私は貴重な体験を生かしているのです。私は考古学のまとまった資料や大切な文献をみんな焼いてしまいました

が、文献以上の資料を見出しているのです。それは私の今の生活を原始時代のものともみて、その体験を資料にし、実験しているのです。今までの学者は石器時代の遺跡を地下から発掘しましたが、私は生きている生活を発掘しているつもりなのです。八紘一字の精神にも一致します。遺跡の発掘は米英的な科学にすぎませんが、私のは、学問の真髄、日本精神にのつとつた唯一最後のものなんです。ここまですななければ、考古学は分りません。そして、私が考古学に於て日本精神による方法の勝利を発見したように、米英の科学思想は究極に於て日本の復古精神に敗れますよ。日本全土が焦土と化した後に於て、米英の科学思想は逆に日本に弱点をつかれます。日本の勝利は近づいているのです」

「なるほど、石器時代を体験なすっていらつしやるのですか。なるほど、タオルはなかったでしょうな。たしかに沐浴のあとでは、からだを天日にかわかしたでしょうな。しかし、失礼ですが、石器時代は貝塚とか云つて、物をナマで食べていやしませんか。まあ我々の食べ物は調味料もなし、豚のエサで、石器時代以下かも知れませんが、あのころは、また、穴居とも云いましたようですね。鶏小屋は変じやありませんか。防空壕で起居なさる必要があるでしょう」

亮作は無言であつた。野口は意地わるく追求した。

「さつそく、穴居すべきですよ。防空壕へ住みかえなさい。真の石器時代を体験すべきです。鶏小屋でごまかしては、いけないで

しよう」

亮作は弱々しい笑いをうかべた。すると、口に泡がたまってきた。

「仰有る通りです。でも、急ぐことはありません。自然にそうせざるを得なくなりますから。日本は焦土になります。ここも焼けるか、吹きとぶか、どちらかです。みんな次第に穴居しますよ。ムリにすることはないので。自然になされた状態に於て、はじめて体験の真理が会得されます」

「ほんとですな」

「むろんです」

「石器時代に毛布やフトンや着物がありましたかね」

「むろん、ないです」

「なぜ着物をきてらっしやるのですか。戦災者特配の毛布は、うけとるべきではなかったですね。なぜ、お貰いになったのですか」

「いえ、それでいいのです」

「なぜですか。せつかくの自然状態を自ら裏切つてやしませんか」
「いえ、いいのです。今に、くれる物もなくなる時がきます。みんな、裸になる時がきます」

「それでも日本が勝ちますか」

「かならず勝ちます。『有る』思想は滅亡すべき性格です。『無』の思想には、敗北はないのです」

「あたりまえですよ。無より悪くはなりっこないにきまっています」

よ」

「いえ、無が有を亡すのです」

亮作の弱々しい目に妖光がたまっていた。神がかりの度がひどくなつていくようであつた。

日本の諸都市のバクゲキがあらかた片づいて、夏がきた。

伊豆半島、特に伊東に敵が上陸してくるといふので、氣違ひじみた騒ぎが起つた。上陸に適した地勢で、おまけに鉄道の終点であり、敵はここを基地にして、首都へ東上する、そんな尤もらしい噂が流布して、ここが本土の最初の戦場になることを土地の人々が信じはじめた。

その流説を裏書するように、一個師団がゴツソリかくれて敵の

上陸を待ちぶせることが出来るような洞穴が伊東の四周の山々に掘りまぐられ、亮作もモッコ運びにかりだされた。

伊東から四方へ走る峠の細道は、家財を運んで本土最初の戦場を逃げる人々でごった返している。別荘の売物が諸方に現れて、ただのように値が下ったが、買い手がない。

野口もあきらめた。本土最初の戦場ではないにしても、東京にちかい太平洋沿岸が修羅場になるのは、おそかれ早かれ必然の運命だ。このへんの山という山、海という海が火をふいて、空という空を弾が走るにきまつている。すべての家も木も吹つとんで、一面にひっくりかえされた土地だけが残る。こんなところに住むのは、自殺するようなものである。

野口は軽井沢に別荘があるから、案外あきらめがよかった。吹きとばされる先に、別荘をうつて、軽井沢へひっこむにかぎる。安くても、ただ吹きとばされるよりはマシである。よその別荘は売れなかったが、彼は売りつける自信があつた。

いったい亮作は肌身放さぬ包みの中に、いくら持っているのだらうと野口は真剣に考えこんだ。

「梅村さん。私たちは軽井沢へひきあげようと思ひますが、どうです、この別荘を買いませんか。土地ぐるみ、温泉ぐるみ、ただの一万。まるで捨てるようですが、あなたになら、一万でゆずりましょう」

亮作はモッコかつぎに出ていたから、町の様子は手にとるよう

に知っていた。

持てる連中は大騒ぎだ。別荘や運びきれない物品が捨て値で売りに出ている。それでも買手がない。町の人々は敵の上陸を信じこんでいるからだ。亮作がそれを信じないわけはなかった。しかし彼は持たないから、落付いており、あらゆる人々に穴居の運命が近づくのを見ているだけのことであった。

亮作は自分の家が欲しいと思っていた。焼けだされた当時は、住むべき家のないことが何よりの悲しさであったが、今はそれほどでもない。なぜなら、何百千万の同類ができたからである。しかし欲しくないことはない。

もしも捨て値の別荘を手に入れて運よく戦禍をまぬがれたらと

亮作は思った。今の彼の運命は逆転してしもうのである。家をもてる小数の一人となるかも知れない。

町の中の別荘とちがって、野口の住居は平野のドンツマリの畑の中に孤立している。ひよつとすると、助かる可能性がある。あるいはこの町でただ一人の家をもてる人となるかも知れない。そう考えると、むくむくと人生の希望がわいてきた。

しかし野口の言い値は法外であった。彼は野口のずるさを憎んだ。

「この十倍も大きくて立派な別荘がたった五千円で売りにでいますよ。それでも買い手がありません。あたりまえですとも。一二月あとは、跡形なく吹きとばされるのですから。一二月

の家賃ですから、まあ、高くて百円です。あなたの家でしたら、三十円ですな。それでも高いぐらいです」

亮作は残酷な笑いをうかべた。

「冗談云つちやいけません。消えてなくなる別荘とはちがいますよ。土地と源泉がついています。何十トンのバクダンでも、これをどうすることもできないのです」

野口は薄笑いをうかべて言い返した。一万円は持たないようだ。すこし高すぎたかな、と思った。そして高圧的な商談をたのしもうに語りつづけた。

「あなた、ひがんではいけませんよ。たとえば、単に別荘だけでしたら、金殿玉楼も買えないのは当然かも知れません。いま

敵に追いつめられ、窮亡のドン底にある我々に、最大の財産はな
んですか。言うまでもなく、自給自足しうる土地ですよ。田畑で
すよ。いいですか。現在に於ては、そうなんです。しかし、平和
恢復後の未来に於ては、田畑の値は下るでしょう。そのときに高
値をよぶのは何でしょう。この土地に於ては、先ず第一に源泉に
きまつてるじやありませんか。伊東の町にはどの住宅にも温泉が
ひいてあるかも知れませんが、源泉の数は知れています。おまけ
に、ここの湯は自噴ですよ。伊東に自噴の源泉なんて、いくつも
有りやしませんよ。大部分がモーターであげているのです。現在
に於ける最大の財産と、未来に於ける最大の財産と、二つをひと
まとめにして、しかもこれが空襲にも艦砲射撃にも絶対不変の財

産ですが、それで一万が高すぎますか。私は親しくしていただいたあなたなればこそ、安くお譲りしようと思つて居るのです。一万円なら誰だつて飛びつきますよ。しかし、見ず知らずの人に売るのでしたら一万円じゃ売りませんとも。失礼ながら、焼けだされて無一物となつたあなたのために、すこしでも尽してあげたいと思つたのですよ。お別れすれば再びお目にかかる機会があるかどうか分りませんが、私としては、最後の友情のつもりなんです。餓別にそっくりタダで差上げたいのは山々ですが、私も焼けだされだから、そう気前よく出来ないのが残念です」

「近代戦の上陸地点の激戦の跡というものは、満目荒涼、山の形も川の流れも変わるでしょう。草も木も、小鳥も虫も、何もありません」

せん。どこに伊東の町があつたか、見当もつかないでしょう。あなたの地所が川か沼にならなければ幸せというものですな。温泉町として復活するにも二十年はかかるでしょう。そのころは、私は死んでいるでしょうな」

亮作は、また、残酷に笑つた。

「すると、日本は亡国ですな」

野口はやりかえした。

「すべてを失つた後に於て、日本は勝ちます。太古にかえり、太虚に至つて、新世界の黎明が現れます。日本は太虚であり、太陽であり、新世界の盟主です。記紀に予言されたところであり、歴史的必然です」

「そうあつて欲しいものですよ。ところで、梅村さん。穴の中に隠れてくらすにしても、人間は何か食わずには生きられませんよ。穴の中の生活に配給はありませんぜ。自分の畑がなくて、あなた、どうなさる。この畑には、鶏小屋も鶏も附属していませんぜ。日本の現状に於ては、まさに王侯じゃないですか。第一、私がこの別荘を人に売ったら、あなたは鶏小屋を追われます。あなたの身柄までひつくるめて、買ってくれる人はいませんからなア」

それは亮作に何より痛いところであつた。もしも、買い手がつけば、亮作が追んだされるのは、まぬがれがたいところだろう。

しかし亮作はひるまなかつた。

「ええ、どうぞ。買い手を探して下さい。私に遠慮はいりません。

ひさしく寄席も芝居も見ませんが、この家を一万円で買った人間の顔を、見るのを、笑いおさめに、鶏小屋から立ち去ることに致しまししょう」

一万円はまずかったな、と野口は思った。露店のセリの要領で、まず一万と値をつけたが、たしかに高すぎた。この値では買い手がいない。追い立てをくう不安がないから、亮作はつけこんで、いきまいている。

「ほんとに、人に売ってもいいのですね」

野口の顔色が、ちよつと変った。

「ええ、ええ。どうぞ。ひさしく笑うことを忘れていましたから」
「五千円なら買いたいという人があるんですが、おことわりした

んです。しかし、私も、金と命をひきかえるのはイヤですから、値ぎられるよりも、時間のちぢまる方が、なお怖いですよ。あなたは売り別荘続出で、買い手がないとタカをくくつてらッしやるようですが、大戦争の生きるか死ぬかの瀬戸際にも思惑をはる商売人がいるもんですよ。私も、つくづく、呆れました。別荘を買い漁っている人種がいるのです」

「それに似た話はきいております。しかし、私のきいたのは、買い漁つてと云うよりも、拾い漁つてと云う方が正しいような話でしたな。買い漁る必要はないのです。別荘をすてて逃げているのですから。引越しの運賃になれば、よろこんで売るそうです」

みんな知っているな、と野口は相手を憎んだが、主眼は、どこ

までも商売だ。一銭でも高く売りつけければ、すむことだ。

「あなたは、まだ誤解してらッしやるようですな。売り別荘は夕ダが当然ですとも。しかし私のは、別荘の価値じゃなくて、田畑と源泉の値段です」

「それでしたら、千円ですな。もう、ちよツと安いかも知れない」

「この田畑と源泉が、たった千円ですか！」

「ええ、千円です」

「何から割りだしたお値段ですか。ひとつ、後学のために、きかせて下さい」

「敵の上陸を二カ月後として、別荘二カ月間のお家賃六十円。それも、四五日後に敵が上陸すれば、丸損ですな。二カ月後から十

数年間は不毛の沙漠となりますから、土地も源泉も値のつけようがありません。値のつくものは、三十羽ほどの鶏と、いま畑にできている野菜だけです。これを高く見積つて、全部でせいぜい千円です。食べきらぬうちに敵が上陸すれば、これも丸損になります。そこを半々にみて、五百円がいい値でしような」

「あなた、また、五百円に下つたんですか！」

「ええ、そうなります。それでも高い」

「まだ下るんですか！」

「ええ」

「いくらに！」

「明日、敵が改めてくるかも知れない。今夜かも知れない。いえ、

もう、大島辺に敵の艦影が見えて、今に空襲警報がなるかも知れない」

「なるほど。すると？」

「タダです」

「タダなら貰って下さるんですか。イヤ、まったく光栄です。あいにく、そのときは私が鶏と野菜をたべなければなりませんから、さしあげるわけにはいきません」

「私、千円で買ってさしあげましょう」

「ハハア。買ってさしあげて下さいますか。千円でねえ」

「ええ。買ったトタンに敵の上陸作戦がはじまっても、私の不運とあきらめます。あきらめては、いけないのです。あきらめては、

この戦争に勝てません。鶏小屋の家賃にしてはすこし高いと思いますが、長らくお世話になったお礼として当然だと思つて、あきらめるのです」

「なるほど。たいへん勉強になりました。色々の計算法があるものですなア。私は感服しましたよ。しかし、驚きましたな。どうして、あなたが、もつと出世なさらなかつたのだろう？　自分の欲する通りに、千円の物を十円に値をつけて、キッチンと思ひ通りの計算をわりだすことがお出来になる。あなたは四角のものを円だと云つて、そのワケをキッチンと説明のできる方です。白いものを黒だと云つて、そのワケをキッチンと証明することもお出来になるに相違ありません。自分の欲する通りの計算がおできなのに、

どうして一生貧乏なさったのでしょうかね。梅村さん。そのワケがお分りですか。なぜ貧乏なさったか？ 思いのままにキッチンと計算ができません。ね。そのワケは、こうです。あなたの計算は、あなたただけしか通用しません。世間ではその計算が通らないのです。四角は常に四角。白は黒では有りえないのです」

「公式通りには、いきません。なぜなら、戦争ですから。一寸先はヤミ、ということ、あなたは忘れてらっしゃるのです」

「あなたは、又、一寸先はヤミ、というウマイ方式で単純に割りきって、手前勝手な言いくるめ方をあみだしていらっしゃいますよ。しかし、ねえ、それでは人生は身も蓋もありません。そうでしょう。たとえばですね。家を買う。戦争の時でなくツたつて、

その晩、火事で焼けるかも知れませんが。源泉をかう。地底の変化で突然源泉が出なくなるかも知れません。牛をかう。翌日死ぬかも知れません。それを理窟にして、五千円のを、千円、五百円、タダにしろと云えますか。しかし、理窟としては、たしかにタダでも有りうるのです。なぜなら、買った日に、燃えたり死んだりするかも知れませんか、ね。あなた、その理窟をふりかざして、世渡りができるでしょうか」

「いえ。できますとも。あなたこそ、平時と戦時をゴツチャにして、計算をごまかしていらつしやる。みんな別荘をすてて逃げている時代なのです。すべて物という物が無価値になりつつある時代なのです。あなたの計算が、手前勝手なのです」

亮作の眼は妖光を放ち、口はケイレンして泡をふいた。氣違ひじみた確信だ。

野口はあせらずに、論争の焦点をずらした。

「私は、こう考えますよ。日本が亡び、人間が死滅するのでない以上、戦争の終わったあとで、私たちの希望のよりどころになるものは、私たちの所有している物だろうと思います。何も所有していなかったら、こんな悲しいことはありません。月給だの食糧だのを与えてくれる機関や秩序があるかどうか、見当もつきませんからね。無一物なら、むかしの野武士のように、強盗でもして生きる以外に手はないでしょう。あなたの年では、強盗もできません。笑いごとではありませんよ。日本人は誰にせよそんな不安を

感じているにきまっています。そのときに、田畑や源泉を所有しているということ、群盗横行しても、田畑や源泉は盗まれませんよ。この悲惨な戦争の最中も、田畑や源泉を所有していることが生きがいになりやしませんか。この家だつて、必ず戦禍にやられるとはきまっています。戦禍にやられるかも知れないということとは、やられないかも知れない、ということ。人間は夢を持たなきやいけません。夢をもてば、たのしいものですよ。しかし、私は、夢に値段をつけようとは云いません。この田畑と源泉が五千円です。六千坪あります。一坪一円にも当らないではありませんか。失礼ながら、あなたの生涯に、もしも戦争がなければ、六千坪の田畑と源泉を所有することなど、夢にも有り得なかつたで

しよう。人も羨む源泉ですよ。ただ少数の階級だけが所有し得たゼイタク物ですよ。もう、これ以上は申しません。あなたの運を御自由にお選び下さい。五千円なら売ります。おイヤでしたら、やめましょう」

亮作は肌身放さぬ包みの中に七千余円もっていた。これは彼が主として野口に使われてからの五カ年間にためたものだ。万事が配給の時世となつて、いくらも生活費がかからず、信子と克子は大伯母からの仕送りで別個にくらすようにもなつたから急速にくわえが出来たのである。

彼は孤独の行く末を何より怖れていた。怖れの根本は、無一物というところから来ているのである。自分に才のないことも骨身

に徹している。そして、年もすでに五十である。そして、無一物である。

彼はこの別荘をどうしても買いたい気持ちになっていた。家も田畑も、源泉までも所有しているとは、なんてすばらしいことだろう。このドンツマリの家だけは戦禍をまぬがれるかも知れないし本当にまぬがれるような気もするのである。

たとえ家はやられても、この田畑さえあれば、安穩な老後が送れる。

彼が金をもたなければ、どうしてもこの別荘を買いたいために、泥棒したいと思ったかも知れない。あいにく彼は買えるだけの金を持っていたので、金をだすのがイヤであった。だまされ、ぬす

まれるような淋しさがあつた。

だが、それにしても、家と田畑と源泉を所有することが、悪かろうとは思われない。自分がそんな身分になろうなどは、考えられないほどだつた。天にも昇る期待がこみあげる。すばらしい人生。すばらしい戦争。

彼はクシヤクシヤ泣きそうな顔に、にえきらない笑いをうかべて、

「じやア、二千円で買ひましよう」

「何を仰有るのです。私だつて疎開を急がなければ、こんな捨値で売りやしませんよ。今どき、五千円ポツチで何が買えますか。

あなたのように、家も土地も所有したことのない方に、こんな話

をしたのがマチガイでした。私も長い辛酸のあげくに、ようやく
念願を果したこの別荘です。ハシタ金で、ボートクを加えるほど
なら、火をかけて燃した方がマシですとも」

「ボートクじゃないのです。私はお金がないのです」

「じゃア、およしなさい。お金がなければ、話になりません」

「じゃア、三千円で手をうちましょう」

「誰が手をうつのですか」

「私はそれしかお金がないのです」

「ですから、お金がなければ、お止しなさい」

「あなたは卑怯です」

「なぜ」

「私のような鶏小屋の住人に売買の話をもちだす以上、私のもてる限度に於て取引に応じて下さるのが当然でしょう」

「私はあなたとは論争しません。あなたが弁護士でしたら、殺人犯人がどんなに喜ぶか知れませんよ。泥棒や詐欺は正業という結論になったでしょうよ。債権者は罪人になります」

「私をからかうために、この売買の話をもちかけたのですね。それでしたら、あなたは本当に罪人ですとも」

「あなたに善人とよばれるよりは、罪人とよばれることを喜びますよ」

「あなたは私をぬか喜びさせ、期待にふるえる思いをさせて、ドン底へ突き落したのです。希望をもたなかつたうちは、私は鶏小

屋の生活に安住することができたでしょう。こんなふうには、いつペン空へ抱き上げて、突き落されては、私はもう平静な心境を失いました。私は絶望させられたのです。手足を折られた上に、さア働いて生きて行け、と突き放されたようなものです。私をどうして下さるのですか」

「私は何もしませんよ。この土地と建物を売って、軽井沢へひきあげるだけです」

「じゃア、二千五百円で、土地の半分と、建物の半分と、源泉の半分を売って下さい」

「あと半分の買い手を探していらしたらね」

亮作は顔をしかめて、手放しで、ポロポロとなきでした。

「私は悲しい思いを忘れていました。悲しい思いを忘れずに、どうして鶏小屋に生きられましょう。必死に努力したのです。そして、どうやら、ウヅムシのような生活にもなれることができましたのです。恥も外聞も忘れて、希望もなく生きる心境をつくることができましたのです。それが私の全財産でした。あなたは私の全財産をうばい去ったのです。そして忘れていた悲しさを、いや、もつと大きな悲しさを私の胸に叩きこんだのです。まるで火の玉のように、私のからだの中を悲しさがころげまわり、走り狂っています。三月十日のあの怖い空襲の火の舌が、私の背を焼き、追いつめてくるではありませんか。私はどうしたらいいのです。三月十日の空襲よりも、もっと怖い艦砲射撃が耳の底に鳴っています。」

空という空に火の線が走って、山はゆれ、岩は砕け、大地はわれ
て、火をふきあげるではありませんか。私はすべてに見すてられ
ました。もう歩く力もないのです。私はどうしたらいいのですか」
亮作の喉にクツクツクツとこみあげる音がして、にわかにはヒツ
と泣きふしてしまった。

野口はなんとなく哀れに思い、三千円だと引越しのツケトドケ
にしかないが、どうせ戦禍に消え失せるもの、捨てるよりは
三千円で売った方がマシだろうと思った。

けれども一皮むいて考えると、同情してみたって始らない。戦
争というこの冷酷な魔神の通路には、ただ運命があるだけで、誰
だって自分の意志でそれを逃れることはできない。自分自身が一

時間後にどんな運命になるか、誰も知ってやしない。人に同情するなどは身の程をわきまえぬ愚行であろう。

「なに、ここだけが戦場になるわけじゃありませんよ。おそかれ、早かれ、日本中がそうなるのです。私は、高いとか安いとか選り好みできるあなたの境遇がうらやましいと思つてますよ」

「じゃア、死ぬる思いですが、思いきつて、四千元だします。四千元で売つて下さい」

「いえ、いけません。五千元。最低の値をつけたのです。私は商売をしているわけではありません。五千元という捨て値は、まったくの捨て値で、損得勘定の根拠があるわけではありません。ひとつの気分でヒョイときめた捨て値です。愛着のこもつたものを

捨て去るときの悲しさをいたわってくれるものは気分だけです。私は気分をこわすわけにいきません。商取引のように、値切られたり、まけたりするわけにいかないのです」

亮作は氣違いじみた泣き顔をあげて野口を見つめた。ちよつとオドオドしてはいたが、いつもするような薄笑いの翳はなかった。「五千円で買ったなら、あなたは今日中に立退きますか。いえ、今日中に立退いて下さい」

「今日中はムリですよ。先日来、駅との談合で、明朝荷物を送りこむ手筈になってるのです。用意はできていますから、明日の午後、立退きましょう」

「きつとですね」

「むろん、まちがいはありません。それで、あなたは、いつ五千円下さるのです」

「あなたの立退きとひき換えに」

「いえ、いけません。もしもあなたの気持が変わると、私は出発のばして、買い手を探さねなりません。私が怖れているのは、疎開の時間がおくれることです。いま、五千円、いただきましよう」

「いえ、それは片手落です」

「おかしいですね。あなたにとつても今日中に一時も早く登記の手続をすませることが大切ですよ。すると、もう、あなたはここ所有者で、安心してよろしいのですよ」

こうして野口の別荘は亮作のものになった。

翌日、野口は荷物を馱へ送りこみ、クワ、鎌、鉋、スコップなど野良道具をぶらさげてきて、

「一式百円で買いませんか。大工道具一式、左官のコテまで揃ってますぜ。御不用なら、馱前でセリで売りますがね」

「百円は高い」

「ほんとですか。桶もテンビンも、噴霧器まで揃ってますぜ。どこを探しても農具や大工道具は売ってませんよ。そして、現在これ以上の貴重品はありません。有り過ぎて困る物ではありませんから、持っただろうかと思っただのですが、こちらに何もなくては、せつかく田畑があつても耕作にさしつかえますから、お譲りしよ

うと思つたのです。高いと仰有れば、重いけれども持つてきましよう」

「それは畑に附属したものです」

「それじゃア家具は家に附属した物ですか」

「いえ、それは屋外で使う品物だから」

「アハハ」

「いえ、買いますよ」

渋々包みから百円札をだした。

野口一家は去つてしまつた。

野口がこの別荘をつくつた時から、女中部屋に風変りな留守番が住んでいた。このへんの人は「金時」とよんでいたが、まだ二

十四の女であつた。顔もからだもまるまるふとつて、怪力があつた。

金時は田畑を耕すことは知っていたが、料理はできなかつた。金時に料理をつくらせると、鍋に熱湯をたぎらせて調味料をぶちこみ、飯でも野菜でもなんでもかまわず投げこんで、シヤモジでかきまわすだけである。ほかの食物をつくらなかつた。

しかし野良では男の何人分も働いて、二町歩の田畑を楽々たがやした。鍋をかきまわすことよりも、肥ダメをかきまわすことを好んだ。

金時のもとへ忍んでくる物好きな男もなかつたので、田畑づきの別荘番としては、これ以上の適任者は見当らない。

亮作は耕作の知識がなかったので、つづいて金時に居てもらふことにしたが、二町歩の耕地の実りは大きいから、敵が上陸してくるまでは、金時の働きで左ウチワの生活ができるのである。

たった一日でフシギな変動であつた。鶏小屋住いの無一物の亮作は、今はしかるべき富豪になつていた。それは敵の上陸をめぐつて計算された取引であつたが、敵が上陸してくるまでは彼が別荘の主人であるのはマギレもない事実であつた。

亮作は満足であつた。そして自分の物となつた座敷へあがつてボンヤリしていた。戦争中の人間は自由の時間にボンヤリするのが例であつたが、亮作はもつとボンヤリした。

金時が部屋へきて、彼のうしろに立つた。

「フトン買ってくれ」

「フトン？」

「カヤもいる」

「お前、もたないのか」

「お前も、もたないだろう」

亮作の胸にほろ苦いものがこみあげる。やっぱり無一物なのだ。彼は憤りを覚えた。

「私の毛布、一枚わけてやる。それで、たくさんだ」

「冬にこまる。いま、買っておけ」

「フトン背負って、戦場を逃げて廻れるものか」

「オレが背負ってやる。カヤも買え」

「カヤはいらん。今に穴ボコの中で暮すようになるのだ。穴の中にカヤはつられん」

「つれる。つれる穴をつくつてやる。鍋と釜を買いえ」

「私が持つとる」

「小さい」

「小さくない。四人で充分にくえる」

「くえん」

「お前バカだな。あの釜は一升たける」

「三升たかねばならん」

「お前、一食に一升くえるか」

「オレは一日に五へん食う」

亮作は二の句がつけない。金時は彼をあわれむようにジツと見つけていたが、さとすように言った。

「みんな買ってあげ。今が安いぞ。オレが安く買ってきてやる。持つてる金、みんな、だせ」

「どうするのだ」

「金のあるだけ品物を買う」

「バカだな。一文なしで、くらせるか」

「心配するな。オレにまかしておけ」

「電燈屋がきたら、どうする」

「畑の物を売って払ってやる。お前は心配するな」

「そうか。本当に大丈夫か」

「大丈夫だ」

「そんなに買いこんで、戦争のとき、持って逃げられるか」

「オレにまかしておけ」

亮作は金時の言葉にたのもしいものを読みとったので、包みをして、虎の子をだした。二千余円残っている。

そろって、買物にでた。

金時はまず大八車を買った。それは長年月納屋の奥に置きすてられた廃品で、峠越えの疎開用には役立たないシロモノであった。金時はかねて目をつけていたのである。修繕すればまだ使えると亮作に教えた。疎開騒ぎで値の値のしているのは大八車が筆頭だったが、これは法外に安かった。それでも、大八車が結局最高値の買

い物であつた。買った品々は車いっぱいになつてしまつた。

「お前、酒すきか」

「うむ。酒が買えるのか」

「オレが造つてやる」

金時は徳利と杯を買い、瓶を二つ買った。亮作は、なんともいえない有難さがこみあげた。天に向つて感謝したい思ひであつた。

「お前も酒すきか」

「オレはのまん。オレは腹いっぱい食うのが好きだ」

最後に魚釣りの道具一式買った。

「畑はオレが一人です。お前は用がないから、退屈したら、魚

釣つとれ」

「そうか。釣れるか」

「釣れるだろう。イヤなら、やめれ」

「やってみる」

やがて、終戦がきた。

亮作はこのような幸福を夢にも描いていなかった。彼は大八車いっぱいの荷物と金時と共に穴ボコの中に生き残り、廃墟へもどつて、いち早く耕作して、生活の安定をはかることを希望していた。それだけでも充分に希望を托しうる未来であった。しかるに家も畑も残ったのである。

亮作は毎日街を歩きまわった。落付いて坐っていることができなかった。家と田畑と源泉の所有者だという実感が、孤独な部屋

の物思いでは、とらえがたかったからである。ハツとして気がつくと、思わずポロポロと泣いたが、それが所有者の満足だとも思われぬ。そして急いで街へでる。日ごとに街を歩きまわった。

単調な戦争中には見られなかつた小さな変化が街の諸方に起つている。亮作はそれらをツブサに目にいれた。

それは亮作とは何の関係もない変化であつた。所有者になつたという自覚を与えてくれるものは、ひとつもなかつた。それでも、彼には、なつかしいのだ。小さな変化を見るたびに沁しみ々と目にしみる。心があたたかくなるのであつた。

彼はある晩、表札をださなければならぬと思つた。

彼はその時まで表札をだしていなかつた。手紙のくる筈がなか

つたし、もらいたい手紙はひとつもなかった。あらゆる過去に愛着を失っていた。梅村亮作は死んでいる。ひとつ、新しい別人の表札をだしてやろう、そう考えると、こみあげる愉快な思いにたまらなくなった。

彼は窓を開け放して、澄んだ夜空を仰ぎながら想をねった。

終戦前、彼が溪流の岩にかくれて、ひそかに釣をたのしんでいたころ、いつも水鳥がさわいでいた。小鳥の多い溪流であった。

酒を水鳥ともいうのである。これは洒落だ。酒という字を二つにわるとサンズイの水に鳥（酉）となる。金時のつくるドブロクはヘタクソであった。それでも酒の一種になればいい方で、甘酒にしかならないことが多い。金時にはマゴコロがあったが、向上

心がなかつたので、ドブロクの製法が上達する見込みはなかつた。亮作は甘酒ができる、ガツカリしたが、自分で製法を覚えてきて、うまいドブロクを造ろうという考えにならなかつた。毎日うまいドブロクをのむことも愉快であるかも知れないが、金時のへたくソなドブロクや甘酒をのむ方が、満足であつた。今度の瓶は何ができるかいな、と心待ちにする方が、いつもうまいドブロクをのむ単調さよりも好ましいようにも思う。金時は何をやってもゾンザイだったが、ゾンザイなところに生一本の人間味がにじみでている。亮作には人のつくつたうまいドブロクよりも、金時のゾンザイにつくつた出来そこないのドブロクの方が珍重されるのである。

「ウム。水鳥亭。これがいい」

山の端に半月がかかっていた。

「水鳥亭山月。ウム。これだ」

そこで、竹をきり、ナイフで文字をほりこんで、表札をつくつた。



伊東周辺の山々には戦争中敵の上陸にそなえて掘られた無数の穴があつた。それは防空壕とちがい、陸戦用のものであるから、部隊とともに、戦車もトラックもひそむことができるほどの広い

穴である。

その穴の市街地に最も近い一ツが乞食の巢になった。伊東では畑の中に温泉のわいているところもあるし、旅館も、漁師街も、乞食の食用に堪えるものをフンダンに捨てているから、ここは乞食と野良犬の天国であった。上野の地下道の住人でこれを聞き伝えた一部隊の移住をはじめとして、やがて六十世帯ぐらいがここに住みついてしまったのである。

その一人に、もと中等学校（今の高等学校に当るわけだが）の教師だったという六十ぐらいのジイサンがいた。いったいに、この乞食は栄養に事欠かないのか血色がよくて肉づきもよく、また気の向くままに田園の露天温泉に浴することもできるせいか、

身ギレイで、戦争中の焼けだされた人々よりもよほどキッチンとした風をしていた。彼らが乞食であることを見分けうるのは、バケツやハンゴ―やナベや裁縫の道具など、日用品一式を背負って歩いているためで、何も知らない旅行者が彼らを登山家に見立ててもフシギでないほどハイカラな住人もいるのである。

もと中学教師のジイサンは皆にオヤジとよばれていたが、現役の中学教師に見立てることができる程度に精気があって、また威厳があつたのである。その威厳は主として彼の鼻ヒゲと、冥想的な眼光によるのであるが、充分の栄養によつて保たれているに相違ない皮膚のツヤツヤした精気がなければ、威厳の半ばも失われてしまうかも知れない。

彼は孤独と逍遙を愛している様子であった。日用品一式を肩にかけて、職業上の目的とはなんの關係もないらしい静かな落ちついた足どりで街々を歩いているが、たまたま路上に働く人夫を一見れば、

「道路拡張。道路拡張」

と、呟くのである。

また、路傍にわく温泉を見れば、

「温泉湧出。温泉湧出」

と呟くのである。

その彼が、たまたま水鳥亭の前を通りかかった。彼がここを通るのはこれがはじめてであったが、彼の落ちついた逍遙も全然職

業に無関係というわけではないらしく、田園の中にポツンと孤立した水鳥亭前の小道などは今まで歩く機会がなかったであろう。水鳥亭の門前で、彼の落ちついた足どりがふと止まった。かつて物に動じたことのない哲人の足の律動を止めたものは何であったか？ それは門の表札であった。

「水鳥亭山月。水鳥亭山月」

二度朗読をくり返して歩きだした。そして、歩きながら、また
呟いた。

「水鳥亭山月。フム。浪曲師の別荘か」

また呟いた。

「浪曲師別荘。浪曲師別荘」

堀ぎわで畑の世話をした亮作は、ひそかにこれを見、これを知っていたのである。そして息づまるほどの怖れとも驚きともつかぬものに襲われたのであった。

終戦から、もう数年過ぎていた。品物もいろいろと出まわるようになっていた。豚の食物が人間に配給されて、それすらも一月余も欠配するような時世はどうやら忘れられていた。自分の畑の物をこよなき美味として珍重した時世も過ぎていた。金をだせば肉もある、砂糖もある、外国のチーズもある、スコッチウイスキーすらも買うことができる。数年前には一匹のイワシすらも仰ぎ見る貴重品であったのに、伊東の漁師街ではアジやサバの干物なら野良犬すらも見向きもしなくなっていたし、温泉街では一箸

つけたばかりの伊勢エビ料理がハキダメへ投げこまれていた。

穴の中に住む一部隊の乞食たちがだんだん聖賢に近づいているのは無理ではない。居と住に於て不安がなく、むしろ栄養にめぐまれていくからである。

ただ一人亮作のみは——否、名を変えた後の水鳥亭山月に於ても、彼が獲て、また必死に守りつづけているものは、一軒の家とささやかな畑のみであり、そして彼の衣食住は戦争中と全く変りのないものだった。彼は自分の畑の物を食べる以上にどんなゼイタクもできなかつた。金がなかつた。職もなかつた。否。彼は温泉と畑づきの家主たることに誇をもちすぎてしまったのである。フシギなことであるが、その心境は、斜陽族という言葉が何より

当てはまるのかも知れない。すでに彼には氣位があつた。落ちた物を拾うわけにもいかないし、職を得て働くことすらもイサギヨシとしないのだ。

彼は穴の中の住人中で特に精彩を放っているオヤジの存在を知っていた。道路拡張、道路拡張と呟きながら静かに逍遙している姿を見たこともあるし、彼がもと中学校の教師であつたことも聞き知っていた。

彼はオヤジの存在を知ったとき、皮肉な満足を覚えたことも事実であつた。自分は中等教員を半生の願いとしながら、中等教員にはなれなかつたが、温泉と畑づきの別荘の主人になつた、と。そして、もと中等教員は穴の住人にすぎないのだ、と。

しかし、戦争の影が薄れるにつれ、彼の生活がつまる一方であることの悲しさが深まるにつれ、彼が他の誰よりも思いだすようになったのは「オヤジ」の存在であった。それは彼の怖い心の秘密だ。そして、この秘密だけは誰にも知られたくないのであった。

オヤジの安定した生活にひきかえて、彼の生活は不安定そのものだ。何も収入がないのに、税金や寄附に攻められ、齒をくいしばって浮世の見栄を守らねばならない。温泉と畑づきの別荘の所有者とは云いながら、見ようによればオヤジとても温泉と畑の所有者ではないか。彼らは露天ブロを所有しているようなものだし、畑だけでなく、海の漁場も野の牧場も所有しているようなものだ。

山海のあらゆる味を探しだして食うことができるのである。

彼はしかし乞食を軽蔑し、別荘の家主たることを誇る心は忘れなかった。それを忘れることができないから、いけないのかも知れない。彼はオヤジの存在に圧倒されている心の秘密に甚しく臆病になっていたのである。

「浪曲師別荘。浪曲師別荘」

オヤジは呟きつつ歩き去った。彼は塀ぎわに働いていた亮作を認めたとようであったが、浪曲師その人なぞにはなんの興味もなかったらしい。彼の落ちついた足の律動を乱させたのは、主として「水鳥亭山月」という表札であったのである。亮作も、それに気がついた。

「水鳥亭山月……」

オヤジの姿が遠くに消え果ててから、亮作はふと呟いた。

オヤジの認めたのは水鳥亭山月の表札だけで、彼自身の存在ではなかったという事実がしみじみよみがえってきた。それが甚だ当然のような気がしたのである。

「この表札は、オレのではない」

水鳥亭山月の表札をおろそうと思った。けれども、門前へまわって表札を見ると、いたましくて、とても取り去ることができなかつた。いくどか思い直したが、また、ためらって、どうしても外せなかつた。

翌朝、表札を外す代りに、彼自身が鶏小屋の横手で首をくくつ

て死んでいる姿が発見された。

青空文庫情報

底本：「坂口安吾全集 09」筑摩書房

1998（平成10）年10月20日初版第1刷発行

底本の親本：「夜長姫と耳男」大日本雄弁会講談社

1953（昭和28）年12月発行

初出：「別冊文藝春秋 第一五号」

1950（昭和25）年3月5日発行

※初出時の表題は「水鳥亭由来」です。

入力：tatsuki

校正：花田泰治郎

2006年4月8日作成

2014年5月30日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

水鳥亭

坂口安吾

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>